

瓜の歌：催馬楽「山城」と和歌

大木，桃子
筑紫女学園大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/15071>

出版情報：語文研究. 105, pp.1-17, 2008-05-20. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



瓜の歌——催馬楽「山城」と和歌——

大 木 桃 子

はじめに

瓜の歌と言えば、山上憶良作「思_三子等」歌一首并序」の「瓜食めば子ども思ほゆ」（『万葉集』八〇六）の一節が有名であるが、これは後の和歌に継承されなかった。平安朝以降の瓜を詠み込む和歌は、ほぼ例外なく催馬楽「山城」を踏まえたとされている。「瓜つくり」の語が使われ、縁語として「なる」「たつ」が多用されるからだ。この理解に間違いはないのだが、催馬楽の「瓜たつ」は未だ決定的な解釈が出ておらず、「たつ」の縁語としての用いられ方もさまざまである。又、催馬楽の影響を受けながらも、平安朝中期以降は瓜の詠まれ方に変化が見られる。これらの点を中心に、「山城」の

再解釈と、その影響下に成った和歌の検討を試みたい。

—

「山城」を引用する。

三三二

山城の 狛のわたりの 瓜つくり な なよや らいし
なや さいしなや

瓜つくり 瓜つくり はれ

瓜つくり 我を欲しと言ふ いかにせむ な なよや
らいしなや さいしなや いかにせむ いかにせむ はれ

いかにせむ なりやしなまし 瓜たつまでにや らいし
なや さいしなや 瓜たつま 瓜たつまでに^(注1)

諸注の指摘のとおり、囃し詞を除けば

山城の狼のわたりの瓜つくり我を欲しと言ふ瓜たつまでに
又は

山城の狼のわたりの瓜つくり我を欲しと言ふいかにぞ我
がせむ

という短歌形式に還元できる。「我を欲し」は文法的には
「我が欲し」とあるべきところで、破格であるが、『万葉集』
二二六六の旋頭歌

山城の久世の若子が欲しと言ふ我あふさわに我を欲しと
言ふ山城の久世

に類例があることが古来指摘されている。山城の狼は瓜の産
地として有名であった。今も京都府相楽郡の山城町と精華町
に、それぞれ上狼、下狼の地名が残る。当時、渡来系の人が
特殊な生活集団を作っており、渡来人と日本女性の交渉を歌つ
たものであると考えられている。

さて、この歌からは、瓜つくりの男の求愛の熱心が読み
取れる。一、二段落に特に問題はないが、三段落目は誰の言
葉と取るかも含めていくつかの問題を含んでいる。以下それ

を検討する。

①「なりやしなまし」について

催馬楽注釈書の嚆矢、一条兼良の『梁塵愚案抄』^(注2)は

瓜作の妻になりやせましと也

と求愛された女性の心境と解している。賀茂真淵『催馬楽考』^(注3)
も同様の解である。近代になって、小西甚一(『日本古典文
学大系』)が、『古今和歌集』の伊勢歌

一〇九九

をふの浦に片枝さし覆ひなるなしのなりもならずも寝て
語らはむ

を引き

「きつと話がつくかも知れないわよ」と訳した。「実がなる」
を「婚姻が成立する」意との掛詞としてしているのである。白田
甚五郎(旧・新『日本古典文学全集』)は

「山城の狼の里のあたりの瓜づくり ナヨヤ、ライシナ
ヤ、サイシナヤ、瓜づくり 瓜づくり ハレ。瓜づくり、
私を愛人になりたいと言う。どうしよう。ナヨヤ、ライシ
ナヤ、サイシナヤ、どうしよう、どうしよう、ハレ」
「どうしよう。まとまるでしょうか、瓜が熟するまでに
よ、ライシナヤ、サイシナヤ、瓜が熟するまで、瓜が熟

するまでに」

と、男女の掛け合いと取り、「なる」は婚姻がまとまること、「まし」は「らし」と同義と解している。小西説と一部共通する。以上の諸注は、婚姻がまとまること、妻になることがいいのか悪いのがはっきり示していないが、否定的な要素は感じられない。

これに対し、池田弥三郎（鑑賞日本古典文学『歌謡』Ⅰ）は、瓜が成熟することと男女の仲が成立することが「なる」であるとし、先の旋頭歌を挙げて

この旋頭歌でも、言外に「いかにせん」という気持ちがあるが、このほうは、玉の輿への空想を楽しんでいるのだが、催馬楽のほうは、瓜作りの求婚が嬉しくはない「いかにせん」である。

と述べ、渡来人と日本人の文化・宗教の違いを指摘する。現代語訳も

：困るじゃない。いけ好かない。どうしよう。できたらしいねと人の口。瓜のつま。いけ好かない。

とはつきり拒絶の歌とする。「たつま」に「立つ」と「妻」を掛けていると見ている。折口信夫（『折口信夫全集』第十巻・ノート編）は

これではわからぬ。「そういうふうになっているかもし

れない。なるはずがないのだが、なっているかもしれない」というべきだが、そこまで導く内容がこの歌にない。

とし

文法の乱れかけている時分で、「まし」も「らし」もはっきり知らずに歌った時代だ。

と述べる。現代語訳は

どうしたらよいでしょう。困ったことだ。瓜が立つ程度になつてしまつてにちがいない。その瓜が立つ程度に。

という独特の解釈をしている。「までに」を期限と見ず、程度と取つていたのである。又

下の段では評判が立つといつていはいえぬが、どうもそういう気分らしい。

とも述べる。二人の噂が広まって困ったことだ、と捉えている点で池田説に近い。西角井正慶（日本古典鑑賞講座十四『日本の歌謡』）は、次のように述べる。

瓜作人に対して揶揄する口吻が感じられるが、何としてもこの囃子詞のリズミカルな興奮がよろしい。如何せん

の狼狽もやる瀬ない気持よりはどこか滑稽味がある。拒否とは言え、女の心は軽い。以上、白田以外は女の独白として

さて、「なりやしなまし」の意味を考察するために、和歌や物語や中での使われ方を調べてみよう。助動詞「まし」は一般に疑問の助詞と共に用いられた場合はためらい・迷いの気持ちを表すとされる。和歌には次のような用例がある。

六〇六

忠房朝臣

隠沼に忍わびぬる我が身哉井手のかはづと成やしなまし

〔後撰和歌集〕

一七九七

題知らず

道信朝臣

いにしへの山井の衣なかりせば忘らるゝ身となりやしなまし

〔新古今和歌集〕

二首は、起こりうる事態を想定し、そうなりたくないと思う気持ちである。一方

七七〇

題知らず

勝観法師

しのぶれば苦しかりけり篠薄秋の盛りになりやしなまし

〔拾遺和歌集〕

六七

はじめてあへる女にかがみをかりて返しつかはすとて
みてのちはいとど心ぞます鏡かけすむ人になりやしなまし

〔基俊集〕

のように、できることならそうなりたいたいという心境を表す場合もある。「なつてしまふのだらうか、なりたくない」、「なれないけれど、なりたい」と起こりうる事態によって気持ちも揺れ動く。物語には次のような例がある。

「…いかさまにせむ、法師にやならなまし、死にやしなまし、滋野の帥のやうに憂へをや申さまし」となむ思

ひ騒ぎし。…

〔宇津保物語〕蔵開下

藤壺の東宮入内が決まったときの自分の心境を回想して、涼が仲国に語っている場面である。「どうしよう、法師になろうか、いつそ死んでしまおうか…」という切羽詰まった思いである。「山城」の「なりやしなまし」も「いかにせん」と共に用いられているから、ためらいの意志とみるのが自然である。歌謡は歌われる場、歌い手の立場によって多様に解釈できるという特色を持つ。一部が歌い変えられて広まることも少なくない。しかし「山城」に限って言えば問題の部分は「婚姻がまとまるでしようか」でも「噂が広まっているだろう」でもなく、「(なりたくないが)瓜つくりの妻になってしまおうか」と訳するのが最もふさわしいであろう。歌全体は女性の独白と思われる。もちろん「なる」に「瓜の実がなる」が掛けられていることは言うまでもない。

②「瓜たつ」について

「瓜たつ」は瓜が熟することと解されている。果実が熟するのは一般的には「熟む」であり、「たつ」という表現は使わないが、『梁塵愚案抄』が

瓜のなりたつまで猶やまずほしと云心なり

と注したため、以後皆その解釈に引かれてるように思われる。『催馬楽考』も

瓜のおひたつまでにしばしはなりやせんやといふか

とする。橘守部『催馬楽譜入文』^(注)は先注を退け、三段目を男の言葉と解し、「うりたつ」を女が初めて男に逢う意の「破瓜」と取る独特の見解を示している。破瓜は瓜という字を二つに割ると八が二つになるところから、二八〇十六で女子の十六歳、又は八八〇六十四で男子の六十四歳という年齢を示すもので、処女貫通とは直接関係ない。守部が根拠としたのは中国の「楊文公詩」と『鞞畊録』、後に改めて問題にする『拾遺和歌集』の三つだが、かろうじて処女貫通の意味に取れるのは明代の『鞞畊録』のみである。しかも「倡家の処女。初(めて)寝を人に薦むることを得(るを)破瓜と曰(う)」とあり、遊里の水揚げの意味でしかないのである。そもそも破瓜を「瓜たつ」と読むのは無理であって、瓜は「わる」ものである。安倍晴明が、道長に献上された早瓜の毒を見抜い

た説話では、刀で瓜を切ることも「わる」と表現されている。

(道長が)義家に仰て、瓜をわらせければ、腰刀をぬきてわりければ、中に小蛇わだかまりてありけり。

〔古今著聞集〕術道九・二九四

又、「瓜破」と書いて「うりわり」と読む地名や姓がある。

『入文』の後にした熊谷直好『梁塵後抄』^(注)も破瓜説は取らず

瓜の花落より漸大く成を瓜立といひけんか立はもの、成立也

とする。

近代になって、小西甚一が『日本古典文学大系』の頭注で瓜が熟する。ほかに用例を見ないけれども前後の関係から推して、熟することらしい。旧説は「立つ」として解するが、むしろ「経つ」の方から来たものではあるまいか。瓜の花が落ち、だんだん大きくなってゆく間にといつた心持。

と説いた。これが決定打となり、以降、「経つ」か「立つ」かはともかくとして、「熟する」の解釈が定着する。「日本国語大辞典」も「うりたつ」で立項し、「瓜が熟する」の意味を付す。つまり用例がないが、他に良い解釈がないので状況からそう判断せざるを得ない、ということなのである。

これらに対して近年二つの説が出た。まず、松本宏司の論

文を要約してみよう。^(注6)

「熟す」の意味は前後の文脈からの推定で、なぜそのように期限を設定したのかが説明できない。「たつ」を「献上する」という意に取ればいいのではないか。

——析釧 五十鈴の宮に 御饌たつと 打つなる瓢は宮も轟に
〔皇太神宮儀式帳〕延暦二十三年

神に供える食料「おおみけ」を献上することを「御饌たつ」と表現している。

松が崎 絶えぬ氷室に 天皇の 千代の例を 今日ぞたてける
〔六百番歌合・春上二〕

九重に 今日立て初むる 水こそ 風にも解けぬ 例なりけれ
〔千五百番歌合・一九〕

二首は水の献上である。このように、献上する品物であれば何でもその下に「たつ」を直接つけることができようである。実際平安初期には瓜を献上する行事があった。内膳司が直接経営する菜園からさまざまな野菜を決められた期間に納めることになっていたが、『帝王編年記』五月五日の条には「内膳司献早瓜事。」と記されている。しかも早瓜を献上するのは桓武天皇が新たに設けた山城の御園と決まっていた。以上から「瓜たつ」が献上の意味であったなら、「五月五日の早

瓜の献上の日までに」と解せようである。しかしなぜ期限をこのように設定したのかわからないと、この説の意味がない。そこで期限設定の意味を探ると、『延喜式』などの年中行事書に「若不實者。献花根」の割注があることがわかる。初物が実らなくても絶対はこの日献上しなければならなかった、逆に言えば、瓜作りの立場からすれば、瓜がなってこそ面目が立つということになる。そのような瓜献上直前の瓜作りの気持ちを考えて、欲しいと言っている「我」とは実は「瓜の実」なのではないか。「いかにせん、なりやしなまし」は、擬人化された瓜の実が「どうしようか、実ってしまったるか」と言っていることになる。求愛の話だと思わせて最後で事実がわかる、いわゆる「はぐらかしの手法」が用いられている。

以上が松本説の骨子である。「日本国語大辞典」では、動詞「献つ」に

「たつ」に本来「ささげる」の意があるとするほか、「たてる（立）」と同語源で、出發させるの意のものから、物などを他に至らせる、献上するの意に変化したものと考える説もある。

と補注を加えている。さらに「奉る」も動詞「まつる（奉）」の上に出発させるの意の動詞「たてる（立）」の連用形「た

て」の付いたものと考えられているので、松本説の補強材料となるだろう。松本の緻密な考証で、「瓜たつ」の意味をうまく説明できるのみならず、一首の解釈に新風が吹き込まれたかに思われる。しかし「献上する」意味の「たつ」は下二段活用で、「まで」に付くときは連体形「たつる」でなければならぬ。歌謡であるからもちろん文法上の破格はあり得るが、松本がこの点に全く触れてないのが疑問である。破格は当然として無視したのだろうか。しかし新説を出す以上、これを避けては説得力がない。

次に木村紀子説^(注1)を検討する。「瓜たつ」を「瓜たづ」と読み「たづ」は観智院本『類聚名義抄』の「爛」に「タヅ」の訓みがあることを根拠にしている。「瓜が熟しきる」と訳し、女の盛りを暗喩するとみる。従来の訳とさほど違わないが、辞書の裏づけがある分、強みがありそうである。しかし、「爛」には他に「タダル」「コガル」の二種の訓みがある。「たづ」は「日本国語大辞典」、その他の辞書では「腫れ物などの痛みを温湯で蒸す」、又は「船底を燻して船虫を駆除する」などという意味の例しか挙がっていない。中世以降多く用いられる言葉のようである。「熟む」が一般的であるのに、『類聚名義抄』の訓みのみを以て根拠とするのは少し無理があるのではないだろうか。しかもこれも他動詞下二段活用な

ので文法上破格であるが、この点に関して言及がない。

さて、平安朝以降、瓜を詠み込む歌には「たつ」が瓜の縁語として多用されるが、それが「熟す」という意味で用いられている用例が見当たらないのである。後に引用するように縁語のほとんどは瓜生山との関係から「霧が立つ」、又「出発する」「名が立つ」「物を断つ」などで、直接瓜の生態に関係ないものばかりである。果たして和歌の作者たちは「瓜たつ」をどう認識していたのだろうか。このことに関して、堤和博^(注2)が、瓜が形態上立ちにくいことを掛けるものが『義孝集』に多いとして、例を挙げるのが目を引く。

二三

左衛門藏人のなほうとかりければ、こうりらのをかし

きをつつみて、それにかきつく

ならされぬみはそのうりとききながらよひあか月とたつ
ぞくるしき 〔『後拾遺集』は「たつぞつゆけき」〕

四七

また、おなじところになちよりたるに、まらうどのありしかば、たちながらかへりて、またあしたに、うりにかきつく

これのみよひとよはひとめつらかりきたちわずらひしうりにやはあらぬ

四八

返し

たちわびてはひかへりけるうりかづらならしがほにや人のみてけむ

七一

ものいひし人に、うりのありしをととりて

たつことのものがりつるうりなれどのちやならずとおもひぬるかな

さらに堤は、『小大君集』八四の歌に關して、竹鼻績が『義孝集』を引きながら、「瓜が容易に立てないのに対して言ったもので」と注していることを紹介している。『小大君集』には後に触れることになるので、ここで引用しておく。平兼盛との贈答歌である。

八三

おなじ人、大監物なりし時、内侍所に御鑑申しに大舎人のひき具して来るに、典侍と知るやうありて、そこにありける折なりければ、前なる臈胸（なつむね）といふ瓜を、黄なる色紙に包みて、翁に、これたてまつれとて取らせたりければ、内蔵寮につきて、そこよりいふ

山城の鳥羽にかよひて見てしかな瓜つくりける人の垣根を
八四

返し

とことばにゆけばなりけり瓜作りそのこととなるたてりしや君（四句目「そのことなきに」の本文が多い―筆者注）

八五

又の日、司召しに駿河守になりてよろこび申しにまゐりて袖より落しおきたりしは、いとこそ

瓜作るそのふも知らず人知れず落つる涙やそぼつなるらん
いとからくもとありし。

「同じ人」は平兼盛で、大監物であつたのは応和三（九六三）年から天元二（九七九）年までだが、八五の駿河守に任ぜられたという詞書から、一応一連の作は天元二（九七九）年のものであると見られる。小大君が贈った瓜にことよせて、兼盛が会いたいと言ってきたのに対し、山城介であるあなたは鳥羽に通う女がいるのでしよう、そこでは何ということなく立っていたのですかと、皮肉を言った。兼盛はそのような女はいないと切り返したものである。竹鼻は理由を明確にしないが、八四番歌の「たてりしや君」の句を瓜が容易に立てないという認識があつたと捉えているのである。

これらはもちろん「山城」を念頭に、「瓜はたつものである」ということを逆手に取った縁語の言葉遊びの歌とも取れ

る。しかし、瓜が生っているとき蔓の先で横になった状態、つまり立っていない状態に連想が働いていないだろうか。「たちぶうり」は小さい品種なので、立ちにくかったとも推測される。或いは、後述するが、当時の瓜は今の真桑瓜と違ってさまざまな形のものがあり、立ちにくかったのかも知れない。そうすると「山城」の「瓜たつまでに」を、「形状的に立ちにくい瓜が立つほどに」と解釈する可能性が生まれる。「まで」を期限ではなく、程度とし、

どうしよう、あの立ちにくい瓜が立つくらい（思いがけないことだが、いっそ）瓜つくりの妻になってしまおうか。と解釈するのである。

もう一つの可能性として、『和名抄』の「熟瓜」に「保會知」の訓があることが手掛かりになるかも知れない。真桑瓜は熟すと自然にヘタが落ちるので、臍の緒が連想されることからの名称である。先に引いた松本論文を参考にすれば、早瓜は完熟を待ってられない。献上のために「蔓を断ち切る」意味の「断つ」と解釈するのである。ただこの案は、瓜の蔓を「断つ」という用例を見出せないことが難点である。本来のほそぢ（臍帯）は「切る」ものであるようだ。

時に竹刀を以て、其の兎の臍を裁る。

（『日本書紀』神代^{（注10）}下）

枕なる刀の小刀にて、臍の緒を打ち切りつゝ、かき抱きて人にも言はず、外へ出で給ひぬと見しよりほか、又二度その面影見ざりしこそ。 （『とはすがたり』巻一）

平安時代、「たつ」は瓜の縁語と意識されはしても、「瓜たつ」自体がどういう意味なのか既にわからなくなっているとも考えられる。

二

早い時期、瓜を詠み込む歌は「山城」を踏まえ縁語を連ねるものが多かった。忠岑と躬恒が詠み交わした歌群の中に

一二二

うりふざか

みつね

としふれどなるともみえぬうりふざか春のかすみのたて
ばなりけり

（『忠岑集』）

又

一六

あるところの屏風のゑに、しがのやまごえのところ
なにはおへどなれるもみえずうりふざかはるのかすみの
たてるなりけり

（『頼基集』）

一六九

うりふ山、きりふかし

名にたかくなりはしぬれどうりふざかきりのみたてばみ
えずもあるかな
〔惠慶法師集〕

と、屏風歌や題詠に同趣向の歌が見える。志賀の山越えに瓜生坂（山）を配し、なる・たつの縁語を詠み込んだものである。瓜生坂（山）は山城の狛とは別の場所であるが、音の縁から好まれて詠まれ、後には混同されることもあった。題詠や屏風歌に限らずこれらの縁語の使用は少なくない。

三七

ちよもへよたちかへりつつやましろのこまにくらべしう
りのすまなり
〔道綱母集〕

一三〇

うりうゑしこまののはらのみそのふのしげくなり行くな
つにもあるかな
〔好忠集〕

のように、「山城」の縁語を駆使して技巧を凝らした歌も詠まれたが、特に瓜つくりの性格や行動に着目したものは見当たらない。「山城」には出てこないが、瓜の縁語として、つら（面・蔓）を「つらし」に掛けた最初の歌は『朝忠集』にある。

五

おなじ人に

山しろのうりのつらさはみゆれども思ふ心のならざらめ
やは

ただこの歌は縁語で「つらさ」を引き出しているだけで、瓜つくりの性格にまで言及していない。ところが平安中期になると、瓜つくりを好色だのつれないだのとする歌が目立つようになる。以下その点を検討する。

『拾遺和歌集』に次の贈答歌がある。

五五七

三位国章小さき瓜を扇に置きて、藤原かねのりに持たせて、大納言朝光が兵衛佐に侍ける時遣はしたりければ

音に聞くこまの渡の瓜作りとなりかくなりなる心哉

五五八

返し

定めなくなるなる瓜のつら見ても立ちや寄りこむこまの
すき者

藤原朝光は天曆五（九五）年生。長徳元（九九五）年没。藤原国章は延喜十九（九九）年生。寛和元（九八五）年没。朝光が兵衛権佐になったのは安和二（九六九）年で翌天禄元年十月に少将になっている（同四年七月）ので、この歌は安和二年のものと思われる。ときに国章五十一歳、朝光十九歳である。瓜つくりの心が「となりかくなり」というの

は、どういふことだろうか。瓜が「定めなくなる」とはど
う様子をさすのだろうか。新『日本古典文学大系』は、
「定めなくなるなる瓜」を「さまざまになる瓜」とする。増
田繁夫『拾遺和歌集』も「瓜はなり方が一定せず、様々な姿
でなる」とするだけで、なり方の実態が具体的にわからない。
『食材図典』^(注1)によると、日本の真桑瓜は中国北部のものが
もとになっているという。同図典に現在の咸陽の市場の真桑
瓜の写真が載るが、色・形・大きさともさまざままで品種改良
する以前は日本のものも当然同様であつたろう。確かに瓜の
色・形がさまざまであつたことを示唆する歌もある。

一一〇

うりのあおきなるを、をしのかへりみむきたるよしを、
これはいかがいふべきとあしでにかきてまゐらせたり
つれば、みやより

うりふののさにはすみぬるをしどりの雲るにかよふ心あ
るらし
〔小大君集〕

『恵慶法師集』にも

八四

とりのこのやうなるうりを、ある所にたてまつるとて
わがきみのますべきちよのしるしにはつるのこにこそう
りもなりけれ

がある。又『和泉式部統集』に

三五四

ほかなるはらからのもとに、いとにくさげなるうりの、
ひとのかほのかたになりたるにかきつけて

という詞書をもつ歌がある。ただこれらは形が珍しいから、
めでたいものとして、或いは不快なものとしてわざわざ取り
立てられたということだろう。

もう一つの考え方として、瓜は親蔓、子蔓、孫蔓と蔓を延
ばしていき、それぞれに実がなるのであちこちに定めなくな
るといふ解釈ができる。さて『今鏡』冒頭部に、語り手とな
る姫が大和方面を旅していた聞き手に

このわたりにおはするにや
と問われ

もとは都に百年あまり侍て、その後、山城の狛のわたり
に五十年ばかり侍りき。さて後、思ひかけぬ草のゆかり
に、春日野わたりに住み侍なり。住みかの、となりかく
なりし侍もあはれに

と答える場面がある。ここが『拾遺和歌集』の歌を始め、い
くつかの古歌に依拠していることは明らかだ。以後の姫の話
の内容は、宮仕え時代のことに終始しており、狛のわたりに
住む必然性はない。作者は、教養のある姫を登場させたかつ

ただけである。ここでの「となりかくなり」があちこち変わるという意味であることは言うまでもない。『拾遺和歌集』の歌も瓜の形状より、生り方を念頭に置いて詠まれた可能性が大きい。

さて、『拾遺和歌集』歌に戻ると、「山城」を踏まえながら、瓜づくりの詠まれ方が異なっていることに気づく。「山城」の男は女性を困らせるほどの熱心な求婚者であった。ところが『拾遺和歌集』歌ではいろんな女性に目移りする好色な男になっている。実際多くの女性と交渉のあった朝光を国章がからかったと見られるが、それにしても朝光は小さい瓜を見て、何故このような歌を詠んだのだろうか。

同じ『拾遺和歌集』に

一一〇一

大納言朝光下ろうに侍ける時、女のもとに忍びてまかりて、あか月に帰らじと言ひければ 東宮女蔵人左近
岩橋の夜の契も絶えぬべし明くるわびしき葛木の神
という歌があるように、小大君（左近）と朝光が恋愛関係にあったことが知られている。そして『小大君集』に瓜を巡る朝光との次のようなやり取りがあるのである。

九八

ちひさきうりのきなるを、おなじ色のかみにつつみて

あさみつの少将のがりやるを、ききたがへてよりひらにとらせたれば

雲のたつうりふの里の女郎花くちなし色はくひぞわづらふ
九九

心ときめきしていひたりしかひなければ、返しもせでとり返して、はじめの人のがりやるとして、「我がとなひひそ」といひければ

あり所こまかにいづらしらうりのつらを尋ねて我ならさ
なん
一〇〇

「左近の君に」とのたまへりしかば、われとしられにけりとなたくて

うり所ここにはあらじ山しろのこまかにしらぬ人なたづねそ

『小大君集全釈』によると、このやりとりは小大君の気持ちの高ぶりが感じられ、恋愛の初期の段階であったろうという。朝光が少将であったのは前述のように天祿元（九七〇）年十月から天祿四（九七三）年七月である。天祿四年二月に朝光の姉の皇子が円融帝に入内し、四月に女御となり、七月に立后している。『全釈』の編者は、小大君が皇子入内に伴って彼女に仕えることになり、姉のもとを訪れる朝光と恋愛関

係になったのだろうと推測している。『小大君集』には、瓜を詠み込んだ歌が少なくない。一章で引用した、兼盛との贈答もその例である。八三番歌では、内侍介の領地に生つていた瓜を送つたものと考えられる。又、小大君の実家・領地がこの近辺であつたとも考えられるという。一〇〇番歌で朝光が贈り手をすぐ悟つたのも、そのことが関係しているようである。

さて『全釈』の推測に従えば、二人の恋愛が始まつたのは天祿四年のこととなり、これらの歌も皆同年のものとなる。その他の歌の詞書から、二人の関係は断続的に十年ほど続いたと見られている。朝光と小大君の知り合つた時期が、皇子入内以前である可能性はないだろうか。もしそうなら、国章が既に小大君との恋愛が始まりかけていたことを知っていて、ゆかりの小瓜を贈つて反応を見たとも考えられる。朝光はそれをかわすように「となりかくなり」と言つたのではなからうか。あつちこつち女性に目移りしますよと。『馬内侍集』によれば、馬内侍が宮仕えしていたと思われる頃、兵衛佐であつた朝光と詠み交わした歌があり、二人が恋愛関係にあつた形跡がある。女性関係の多い朝光であるが、兵衛佐時代に小大君と親交があつたか俄かには判断し難い。

さて瓜つくりの捉え方は朝光と同時代から変わり始め、

『拾遺和歌集』の影響を受けた後世の歌人に引き継がれていく。

八一

やすのぶ、ふみおこすれど、いひもはなたねば、うりにかきて

うりふ山そのほどのみ頼めつつ久しくなるはつらきわざかな
(『馬内侍集』)

一一六

或女のもとに、ちひさきうりにかきて

おもはずにつらくもあるかなうりつくりいかななるよの人のこころぞ

一一七

返し

おぼつかなおもひもよらずうりつくりつらくなるべきことしなれば
(『高遠集』)

八五

このうりを人のもとにやりたりければ

うりつくり今はつらさもわすられてよそになれるぞ恋しかりける

八六

とある返しを

山しろのとはのわたりの瓜つくりこまほしと思ふをりぞ
おほかる (『定頼集』)

一四九 このおなじ人、やまとになりていみじうすさまじうな
げかしと思ふに、かくのたまへり

大和をばからしといひし君なればこまのすきものありと
こそ聞け

一五〇 かへし

うりつくるこまのすきもの思はれてやまとにからくな
れる我がみぞ

三四 (『経衡集』)

しりたる人の、とほき国にまかるとて、あこだうりを
おこせたりければ、うりにかきてかへしやる

みるからにつらさぞまざるあこだうりたちわかれゆくみ
ちとおもへば (『頭綱集』)

一一五 寄恋瓜

山しろのこまのわたりのうりよりもつらき人こそたたま
ほしけれ (『清輔集』)

これらの歌は直接「山城」の影響下にあるとは言えない。朝

光の歌を介さねば「山城」に繋がらないのである。

ところで、朝光と親交のあった馬内侍は大斎院に仕えたこ
とで知られるが、『大斎院前御集』『大斎院御集』とも瓜を詠
んだ歌が目につく。

二九〇

みなづきのついたちに、うりをわりてこれかれくふを
みて

やましろのこまどりにとるうりなれば

といへば、みぶ

たちいでぬ人はくふべくもあらず

とてくひあへり (『大斎院前御集』)

四一・四二

おなじころ、はこのふたにちひさきうりをならべてま
ぬらすとて、こだいふ

たちさはるしるしばかりぞあきぎりのうりふの山にも
なれてける

秋霧はふりにけりともうりふやまたちひとからぞあはれ
なりける (『大斎院御集』)

瓜の贈答や瓜に歌を書き付けた日常詠は、義孝の歌から目
付き始め、選子のサロンと一条朝を頂点とする宮廷サロンの

時代に盛んになる。これらの人物の繋がり、つまり、朝光・

小大君・馬内侍・兼盛・選子内親王・和泉式部・赤染衛門らの親交の中で、瓜を媒体とする和歌の表現が育まれてきたのではなからうか。

五八〇

夕ぐれに、ちひさきうりを齋院より給はせたるに、かきつけてまゐらす

夕ざりはたつをみましやうりふ山こまほしかりしわたり
ならでは (『和泉式部集』)

二一七

人のもとにときどきくるをとこの、をかしげなるうり
をもてきてえさせたるを、いかにいはまほしといひし
にかはりて

つらげなる気しきとみるにうりふ山ならしかほにもうち
ゐたるかな (『赤染衛門集』)

扇に載せたり、紙に包んだりするの都合が良かったのか、小瓜をやり取りする例が多く見られる。早瓜とは限らない。前述のように『小大君集』八三に見える「たちぶといふうり」は小粒な品種だったようで、古辞書にも載る。

『類聚名義抄』 颯颯 タチブウリ

『和名類聚抄』 颯颯 太知布宇利 小瓜名也

朝光と国章の贈答は瓜を媒体とした歌のやりとりの先駆的役

割を果たしている。『拾遺和歌集』に入集したのは、朝光と小大君の瓜を巡る交際が有名であったことが影響していると見てよいだろう。私家集で少なからぬ瓜の歌が詠まれているのに、八代集にはこの贈答歌以外は、先に引いた『義孝集』二三番歌が『後拾遺和歌集』に入集しているのみである。又『拾遺抄』になく『拾遺和歌集』にのみ採られているのも見逃せない。『拾遺和歌集』の編者花山院は朝光を重用していた。皇太子時代、朝光邸となっていた閑院にしばしば住んでおり、朝光の娘・姚子を女御にしてもいる。^(注14)朝光の歌は、瓜づくりの性格に別の側面を加え、後世に影響を与えたという意味で画期的なものであった。

「千五百番歌合」も朝光の歌の影響に言及している。

千二百六十八番 左

讃岐

涙河せきやるかたやしがのうらみるめはすゑもたのみな
ければ

右 内大臣

やましろのこまのうりふのよのなかやならしははてで人
のつれなき

左歌は、ふるき歌ふたつをとりあはせてよまれて侍る
にや、はやきせにみるめおひせはわがそでになみだの
河にうゑましましものを、みるめこそあふみのうみにかた

からめふきだにかよへしがのうらかぜ、かやうの心ばへともに侍るか

右歌は、やましろのこまのわたりのうりつくりとなり
かくなりなる心かな、とよめる歌の心にて、こまのう
りふのよのなかやなど、をかしくよみなされて侍るな
るべし、左はいますこし歌合の歌にはかち侍りなん
催馬楽でなく『拾遺和歌集』歌を引き、二つの歌を取り合
せた右歌より劣るとしたところに、この歌の大衆化と判者の
見識が窺えよう。

おわりに

本稿は、第一〇三回黒髪古典研究会（平成十九年十二月一日・於熊本大学）で発表した内容の一部をまとめたものである。その際「瓜たつ」について、複数の方からご意見をいただいた。大根などが時期を過ぎて中に隙間ができる状態を、熊本方言で「す（巢）がたつ」と言う。又、染色用語で藍が発酵することを「藍がたつ」と言うそうである。さらに「とうが立つ」という言葉もある。「瓜たつ」は文献に出てこないが、瓜が何らかの状態になることを表す言葉ではないか、というご指摘である。発表後も調査・考察を重ねたが、納得

のいく結論に至らなかった。拙稿を読んでもださった方々にご意見をいただければ幸いである。

筆者は、瓜を歌い込んだ『梁塵秘抄』三七一番歌の解釈を最終目標にしている。

清太が作りし御園生に 苦瓜甘瓜の熟れるかな 紅南
瓜 ちぢに枝させ生瓢 ものな宣びそ蔽茄子

前後の歌を含めて難解とされ、瓜の種類列挙が何を意味するか意見が分かれるところである。発表で、催馬楽「山城」と『拾遺和歌集』の歌を介して、この歌を解釈しようと試みた。今回はそこまで筆を進められなかったが、さらに考察を深め、「瓜の歌その二」として論文にまとめたいと思っている。

注

注1 鍋島家本

注2 『日本歌謡集成』二

注3 増訂『賀茂真淵全集』一〇

注4 『橘守部全集』七

注5 『日本歌謡集成』二

注6 「催馬楽『山城』考」日本歌謡研究第三十三号 一九九三年

注7 「催馬楽」東洋文庫 二〇〇六年

注8 「瓜を詠み込む歌」―付・『師輔集』の「大和瓜」の歌―伊

井春樹編『古代中世文学研究論集』第三集 二〇〇一年 和

泉書院 この論文からは「瓜たつ」についてのみならず、本稿を書く上で多くの示唆を得た。

注 9 竹鼻績 私家集注釈叢刊1『小大君注釈』貴重本刊行会 一九八九年

注 10 ト部兼方本（鎌倉時代中期）

注 11 和歌文学大系32 明治書院 二〇〇三年

注 12 小学館 一九九五年

注 13 平塚トシ子他偏 翰林書房 二〇〇〇年 底本が坂田文庫本で、注9の書陵部蔵本と歌番号が一つずつずれている。例えば九八はこの本では九七であるが、便宜上注9の歌番号で通した。

注 14 今井源衛 『花山院の生涯』 桜楓社 一九六八年

私家集の本文は特に断らない限り、新編「国歌大観」によった。

（おおき ももこ・筑紫女学園大学非常勤講師）